

友情と文学Ⅱ

今村 泰子*¹

要旨： 友情のあり方についていくつかの文献によって出来る限りまとめてみた。

キーワード： friendship, Literature

以前伝記文学というものを研究したとき、作品の一つとして読んだのは高橋英夫（1930 - ）の『偉大なる暗闇』であった。

夏目漱石が『三四郎』を書くとき「偉大なる暗闇」と呼んだ広田先生のモデルとして選んだのは旧制第一高等学校のドイツ語教授岩元禎であった。

徹底したきびしさの古典的理想主義を信奉する哲学者であった。教え子に情け容赦なく落第点をつける、妥協を知らぬ教師であった。

しかし私は近代ヨーロッパ文化とはじめて接触したこの人の心のたたかひを見て、ただ驚嘆するばかりであった。登場する人物も実在の人たちであった。

この本を読んだ後、岩波文庫版の『九鬼周造随筆集』を開いて、そこにかつて岩元教授の教えを受けた人々が続々と登場するのを見て瞠目したものであった。

私はかつてこの人の「祇園の枝垂桜」という随筆を読み、さすが京都であるとしみじみ思った。

人々と共にうかれる筆者がたしか貴族社会の出身の人であるということも忘れるほどであった。

「一高時代の旧友」という随筆もおさめられている。

そこに登場するのはカント哲学の専門家であり、のちに独協大学の初代学長になった天野貞祐である。この人も岩元教授の教え子である。

筆者は一高の最初の一年で谷崎潤一郎の二本筋の帽子を被った制服姿、それからフランス文学者で、あの『シラノ・ド・ベルジュラック』の名訳——鈴木信太郎との共訳であるが——をものした辰野隆の颯爽としたランニング姿を思い出すとも言っている。辰野隆といえば生粋の江戸っ子で、何かの随筆の中で鈴木三重吉を巻き舌でやっつける場面があった。

同級生で静岡県御殿場の岩下壮一神父も登場する。

九鬼周造は聖フランシスの『小さき花』や『幼き耶穌のテレジア童貞の自叙伝』を自分に読ませたのは岩下壮一であるとのべている。

九鬼が述べている感動的なくだりがある。

* 1 立正大学心理学部

……

「私が西洋から帰ってきてカトリック司祭の黒衣をつけた岩下君と握手をしたときには何故か臉が熱くなった。その後一年ほどしてフランス人のレゼー院長が逝去した後を受けて岩下君は百数十人のらい病患者の父となり、富士山麓の寒村に彼等と起居を共にするようになった。」

こうした思い出の中に登場する人々はみな岩元禎教授の教え子たちである。

ドイツ語を教えるのにも日本で発行されている教科書は一切使わない。みなドイツから取り寄せた原書だった。学生たちはそうした本を開いて印刷された活字のにおいをかいで文化の香りとしてありがたがった。今の私たちには想像もできないことであるが、こうした感情が今の私たちに失われていることは淋しい。

こうした人々が同じ師を中心とした友情に支えられていることに注目したい。

江藤淳 (1933 - 1999) の『去る人来る影』(1982年刊) をひもといてみる。やはり漱石研究で、つづいて西郷隆盛の研究にすぐれた論文を発表していた人だが、病死した夫人の跡を追って自殺した事件は私たちの記憶に生々しい。

森鷗外、志賀直哉、谷崎潤一郎、川端康成、堀口大学以下数多くの文学者が登場する。

若くして世を去った山川方夫のことをのべている中で、江藤は

……温厚で誰にでもやさしい山川とはちがって、私は癩癩持ちで気が短く、社交嫌いな人間であるが、何か暗い重いものを黙って耐えているという意識を共有してはいたからである。だから、私たちのつきあいは甘えあうつきあいというより、甘えあわぬところにルールがあるような親密さから成り立っていたのである。

私はこうした江藤のことばの中に友情というものを見たような気がする。

江藤は

このルールを厳密に共有できるのは山川方夫ひとりだった。

と回想している。

江藤は数え年六歳のとき母を亡くしている。かれは人間が成長するということは、かけがえのないものを喪失していくことだということを子供の頃から思い知らされていたと述懐している。1965年のことだった。

江藤はロックフェラー財団の研究者として1963年にプリンストン大学に客員として滞在した時代を回顧している。かれが会ったアメリカの文学者の一人がソール・ベローであった。ロシア系のユダヤ人であるこの作家は日本でもかなり知られている。この人は来日の際集まったアメリカ文学研究者たちに会った折、人々が文学の話はそっちのけに私生活のことを根掘り葉ほりたずねるので、すっかりつむじを曲げてしまったということである。このことも友情について考えるのに大きなヒントになるような気がする

る。友情には一つしっかりした共通の意識・問題がなければならぬと私は考える。

江藤は坂西志保氏についても細かい観察をしている。彼は言う、

……日本の社会にはひとりで暮らしているとだめになってしまう傾向があります。男でもバチェラー、独身者は変わり者だと見られる。いわんや女性がひとりで社会的に活動しながら生きていくのは、並大抵のことではありません。その意味では、日本の社会はみんなをいつの間にか同じ鑄型にはめこまなければ満足できない、きわめて嫉妬深く、過酷な社会だともいえます。

そういうなかで坂西さんは、人並みはずれた知性と、見識と、強靱な人格を支えにして、くつきりとした個性の軌跡を残しながら見事な人生を送られた、まことに立派な方だと思います。

坂西志保氏のこうした見方は別の人からもきいている。

これも友情を考えるのに大切な条件ではないだろうか。

平川祐弘氏（1931～）が『破られた友情』というすぐれた著書を出している。1987年の出版である。

ラフカディオ・ハーンとB・チェンバレンの日本理解の差が二人を引き離したのだという結論である。ラフカディオ・ハーン——たまたま今年に没後100年に当たるが——

ハーンが本質的に詩人であることは、かれの各種の作品でよくわかる気がする。だがチェンバレンは学者である。私はかれの日本研究の凝縮した『日本事物誌』，もとのタイトルは——Things Japanese——である。タトル商会で出したポケットサイズの版にはJapanese Thingsとなっている。これは実に科学的な精密さを以って書かれている。

Lafcadio Hearn's † "GLIMPSES OF UNFAMILIAR JAPAN," together with the succeeding volumes entitled "OUT OF THE EAST" and "KOKORO." ‡ Never perhaps was scientific accuracy of detail married to such tender and exquisite brilliancy of style. In reading these profoundly original essays, we feel the truth of Richard Wagner's saying, that "*Alles Verständniss kommt uns nur durch die Liebe.*" Lafcadio Hearn understands contemporary Japan better, and makes *us* understand it better than any other writer, because he loves it better.

平川氏に依ればチェンバレンの日本文学に対する評価は、生涯を通じて、徹底した西欧優位の視角の下に行われた。

氏はいう

Literature. We hear of one or two Japanese books as having been composed in the seventh century of the Christian era, shortly after the spread of a knowledge of the Chinese ideographs in Japan had rendered a written literature possible. The earliest work, however, that has come down to us is the *Kojiki*, or "Record of Ancient Matters," dating from the year 712. This has sometimes been called the Bible of the Japanese, because it contains the mythology and earliest

history of the nation; but it gives no moral or religious precepts. It was followed in A.D.720 by the *Nihongi*, "Chronicles of Japan," a more pretentious work written in Chinese, the Latin of that age and country. In about A.D.760 came the *Man-yōshū*, or "Collection of a Myriad Leaves." It is an anthology of the most ancient poems of the language, and is invaluable as a repertory of facts and allusions interesting to the philologist, the archaeologist, and the historian.

..... 『古事記』の英訳を初めて世に問うという大事業を完成したチェンバレン。その序論で『古事記』には文体の美は全くない。かれは、"There is no beauty of style" と言ったのけた。..... 『万葉集』については詩情を認めず、言語学者、考古学者、歴史学者や、すでに消滅しつつある、風変わりな風俗の研究者にとってのみ貴重である。.....

平安朝の物語類は、どれもこれも、みな「我慢のならぬほど平板で味気ないものである。

俳句は第二芸術であると字義通りにこそ言わなかったが、それと似た趣旨を繰り返し述べ、二流俳句の英訳を示して自説の裏づけとした。.....

A favourite game at these tournaments, called *Renga*, wherein one person composes the second hemistich of a verse and another person has to provide it with a first hemistich, seems to date from the eleventh century. Out of this, at a later date, by the dropping of the second hemistich, grew the *Haikai* or *Hokku*, an ultra-Lilliputian class of poem having but seventeen syllables (5, 7, 5). Here are a couple of specimens:

<i>Rakkwa eda ni</i>	}	"What I saw as a fallen blossom returning to the branch, lo! it was a butterfly."
<i>Kaeru to mireba</i>		
<i>Kochō kana!*</i>		
<i>Yūdachi ya</i>	}	"A shower, and head-gear variously ingenious."
<i>Chie sama-zama no</i>		
<i>Kaburi-mono</i>		

this latter a vignette of the scattering caused by an unexpected shower, when one, maybe, will hold up a fan, another don a kerchief, etc., to get as little wet as possible. millions of these tiny dashes of colour or humour have been considered worthy of preservation.

こうした解説を読むと、筆者の脳裏にはハーンの、東大で行ったあの浩瀚な文学論が思い浮かぶのである。

志賀直哉 (1883 - 1971) には戦後、1947年から『世界』に四回にわたって連載された「蝕まれた友情」という作品がある。

かれはのちに「創作余談」の中で、『蝕まれた友情』は少し気が立っているときで、どうしても一度は書かねばならぬことだと思って書いたが、今の自分なら書かなかったらうと思っている、とのべてい

る。

本人がそういう作品に取り組むのも余り芸がない気がする。われわれはやはり『暗夜行路』の作者にはいろいろ悩まされるようである。

友情という日本語の歴史をたどると、織田純一郎訳の・註『花柳春話』（1878 - 79）に

「右手を胸上に置いて曰く、友情独り茲に在り」

というのがある。

・註 三省堂『大辞林』には、リットンの「アーネスト、マルトラバース」と「アリス」を合わせて翻訳したものに、才子佳人の恋愛を漢文訓読体で描いて、後の政治小説などに影響を与えた。」とある。

また高村光太郎の『道程』の中に、

「廃類者よりあつき友情を思へば……」

というのがある。

また広く知られているのは武者小路実篤が1919年に発表した『友情』には、青年作家野島は理想の女性杉子に想いを寄せるが、彼女は野島の友人大宮の許に去るという失恋小説で、恋愛と友情のからみ合いを心理的に描写したものとして知られている。

吉田精一編『日本文学鑑賞辞典 近代編』には、

『「友情」にははっきりしたモデルはないと言うべきであろうが、ただ大宮の性格に志賀直哉を思わせるもののあることは認められている。』

とのべられている。

James Howell (1594 - 1666) の言葉に、このようなものがある。

“ Distance sometimes endears friendship, and absence sweeteneth it. ”

離れているということは、かえって友情をより深いものにし、そばにいないということは、なつかしさを加えるものである。

本稿を終えたのち、偶然入手した、齋藤勇編註の『イン・メモリアル』も是非とりあげなければならぬと思い、加筆した。

著者 Alfred, Lord Tennyson は、英国の北部 Lincolnshire の片田舎に牧師の子として、1809年に生まれた。

学芸に秀で、さらに語学の才にめぐまれ、Cambridge の Trinity College に同時に入学し、相い知ることとなり、友情を深めた。それが Arthur Halem であった。

友の死後、かれは亡き友を偲ぶ詩を書き続けた。哀傷的なエレジーであった。

Vienna で客死した Arthur の遺体を、かれはオーストリアから英国まで運んできた。

かれは過ぎ去った日を回顧しつつも、亡き友を想いつづける。不滅の友情である。いつかかれは靈魂不滅をうたうようになる。

この長詩には詩人の遍歴が語られている。亡き友の品性を追憶して、その結果得られた智慧もうたわれている。

詩人の胸にも、やがて春が訪れる。

That God, which ever lives and loves,
One God, one law, one element,
And one far-off divine event,
To which the whole creative moves

という第三十六節でこの長詩は結ばれている。